
走れシロ！海の道を < 孤島にただ一匹残された犬の物語 >

カーティス・N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走れシロ！海の道を < 孤島にただ一匹残された犬の物語 >

【Nコード】

N6662F

【作者名】

カーティス・N

【あらすじ】

絶海の孤島で、飼い主に先立たれた犬 シロ・・・かれの行く手に待つものは・・・

1、一匹ぼっち

風が耳元で鳴っていた。舞い上がった砂粒が、軀を削るように掠めていく。

「さようなら、源ジイ」

痺れた舌の奥で、シロはつぶやいた。

じっと見据える先、灰色にくすんだ空と海との境に一隻の船が霞んでいく。

おそらく源ジイの体は、車がこつた返すあの埃っぽい町に運ばれていくのだろう。シロがあそこに帰ることはないが、もし帰ったとしても、源ジイに会うことはできない。

冷たくなった細い体は、既に旅だった魂と同じく、決して手の届かない別の世界に送られるのだ。

「うう、寒いや・・・」

いつの間にか、雪が降りはじめていた。逆立った胸の毛並みに、氷の欠片がまとわりついている。冷たさが、毛皮の内側にまで忍び込んできていた。

「独りぼっち」

時折、人間が口にするこの言葉は、こんな寒々とした感じをいうのかもしれない。海にぼつりと浮かぶこの島で、温もりを分かちあう仲間はいなくなってしまった。

とはいえ、シロは人間ではない。だから、一匹ぼっちという方が正しいのかもしれない。人間からいえば、シロは犬という動物で、おまけに狩りなどを得意とする紀州犬という品種だった。もっともシロにとって重要なのは、そんなわけ方ではなく、名まえを呼んでくれる人との、一対一の関係だったのだが・・・

「けど、あんさんは、こんなにも冷たかったのか？」

目に飛びこんだ雪の欠片に、シロは問いかけた。

屋外に置かれた小屋で暮らしていた時は、たとえ吹雪の中でも平気だった。鎖をじゃらつかせ、総ての雪を食べ尽くしてやるとばかり、口を開けて飛びついていったものだ。

どうやら、人間と同じ屋根の下での生活が染みついてしまったようだ。

「まあ、悪いことじゃない。ぬくぬくの生活をして、あんさんの冷たさを知ることになった。それだけのことなのだ」

ともあれ、仲間の見送りは終わった。

ここに残っていても、冷たい風と波飛沫に弄ばれるばかり。シロはぶるりと毛皮を揺すって雪を落とし、荒波の碎ける磯浜を後にした。

「おや・・・」

砂浜と山の間にはぼつりと立つ小屋の前で、シロは首をひねった。

【釣り人小屋】

壁に吊されていた看板が、地べたに横倒しになっていた。いつもは少しだけ開いていた戸は貝のようにぴしゃりと閉じられ、念を押すように板切れが打ち付けられている。

おそらく源ジイの体を運んでいった人間がやったのだろう。辺りには馴染みのない臭いが、ぷんぷらと残っていた。

「ここは、おいらの家でもあるんだぜ」

シロは小さくぼやいて、壁の周りの地面を探った。

幸い、日中でも陽の当たらない場所に、軟らかい土が剥き出していた。しゃかしゃかと掘り込み、背伸びをするように軀をくぐらせた。

少しばかり出ていただけなのに、中はよそよそしく変わっていた。

畳は簀の子の端に立て掛けられ、源ジイがもぐり込んでいた寝袋は、硬く巻かれている。戸口に置かれたストープは目玉のような覗き穴で、「お前は誰だ」と言わんばかりに見返している。

「そんな目、するない」

シロは物言わぬストーブを睨みつけ、憂さ晴らしのように壁の隅の藁束をばらまいた。寝袋を結んだ紐を噛みちぎった時、燻した松の木のような源ジイの匂いが散らばった。炎の温もりこそないが、普段の生活が戻ってきたようだ。

「これで、ちつとは落ち着つける」

一息ついたところで、寝袋の巻き残しに顎を乗せて寝そべった。

と、カサカサという軽い音。

シロの鼻息が収まったのを見計らったように、箆笥の後ろから鼠が走り出てきた。アカネズミのチュウ公だ。

「そういや、こいつがいたんだ」

小屋の中の食べ物をくすねるこそ泥だが、妙に愛想がよくて暇な時のよい遊び相手だった。

「お帰り、シロくん。お帰り・・・」

チュウ公はひどくご機嫌な様子で、頭の周りを走っている。あまり静かなのはいただけないが、こんな日に目の前をちよろちよろされるのは目障りだった。

「ちつとはおとなしくしてる！」

シロは牙を剥き出して怒鳴りつけた。

「ぼ、僕、すごく嬉しいんだ。だって、君も出ていくと思っていたんだもの」

チュウ公は縮こまりながら怖じ怖じと言った。シロはつい大きな声を出してしまったと反省した。

「そももいかないのさ」

そう言っ胸の前で抱いてあげた。いいや、抱いてもらったのはシロの方だ。トクトクと刻まれる鼓動と温かさが、冷えきった軀にじんわりと広がっていった。

「お前は、おいらがここにきた経緯いきまつを知っているかい」

「そんなの知らないよ。知りたいたも思わないし」
経緯なんて構わない。大切なのは、出会った命の、今の、これから
の関わりというもの。
ちびすけのチユウ公だが、シロが時間をかけて、やっと分かったこ
とをよく知っていた。
「ふっ、あっさりした奴」
シロはそつと微笑んだ。

2、想い出

「いろんなことがあるさ。肝心なのは、温かさを分け合いながら、一緒に飯を食っていけるってことだ」

初めて会った時、源ジイはそう言っていた。今思えば、当たり前のことだが、それを聞いた時、シロはガツンと頭を殴られたような気がした。

『この人間こそは、仲間と呼べる人かもしれない』
そんな人間がいるなんて思ってもいなかった。

勿論、源ジイに会う前までも、優しくされたことはたくさんあった。涎タラタラの肉の塊をもらったり、埃まみれの毛並みにブラシを当ててもらったり、時には、とんちんかんな服？を着せてもらった。それでシロは、勝手に人間を仲間だと思い込んでいた。

相手が寂しそうに項垂れていれば、側に寄り添っていたし、怪我をすれば傷口をなめてあげた。よそものに攻撃されている時には、牙を剥き出して守ってあげた。
けれど、それは大きな勘違いだった。

以前、一緒にいた人間の子どもと、機嫌よく散歩をしていた時のことだ。シロの怒りを爆発させる不埒な奴らが現れた。食物や縄張りを巡ってぶつかってくるなら、まだ分かる。

でも、彼らのすることに、納得できる理由などなかった。遠巻きに囲み、汚い言葉とともに石を投げつけてきたのだ。

シロは、自分より年下の仲間を守ろうと、鎖を引いて自由になった。地面を蹴り、牙を剥き出して飛びかかった。怒りは度を超えていたが、冷静さは少し残っていた。それで警告程度に噛みついて、逃がしてあげた。

「ありがとう、シロ」
戻ったシロに、子どもはしゃくりあげながら抱きついてきた。その感謝の言葉に嘘はなかったようだ。

けれど、シロは捨てられた。

どんなことがあっても、人間に牙を突き立ててはならなかったのだ。シロは仲間ではなかった。人間の思いに従わなければ捨てられる、生きるヌイグルミというものでしかなかったのだ。

翌日、シロは町外れにある灰色の建物に連れていかれた。そこはまるで犬たちの塵箱のようだった。あちこちの小部屋から、情けない鳴き声が響いていた。

その内の一つに有無を言わず押し込まれた。

一緒にいた連中で、小さくて毛並みのよいものは、すぐに貰い手が現れ、出口に連れていかれた。一方、病気持ちだったり、シロのように大きめのものは見向きもされなかった。

そして先に入れられた順に奥の部屋に連れていかれ、二度と戻ってくることはなかった。

あそこから漂ってきたツーンとくる臭いの影響は、今でも少し残っている。そのせいで、鼻で世の中を探る力は、幾分か弱ってしまった。

そしてまさに、シロがその部屋に連れていかれる途中、「ちっと、待ってくれ」と、しゃがれ声が投げられたのだ。

「いい、面構えをしとる」

振り返ったシロに皺だらけの笑顔が向けられた。

その時、どんな顔をしていたかなんて覚えてはいない。車と船に揺られ、その日の夕方にはこの島に連れてこられ、鎖と首輪を外されたのだ。

源ジイは、唯一人、島で魚をとって暮らしていた。何故、一人だっ

たかはわからない。でも、シロを連れて来たということは、何処かしら心細さや寂しさがあったのかも知れない。とはいえ、殆ど放っておかれたのだが・

最初シロは、鎖で繋がれていない生活に戸惑った。走り出しても、まるで見えない鎖があるかのように、ぐっと止まってしまった。

『このまま突っ走ったら、あとで酷いことになるのでは・・・』
繋がれていないことを納得しても、源ジイの顔色を窺った。でも源ジイは全く気にかけてず、

「どうせなら、守らなきゃならない鎖に繋がれてみな」
どこか余所を向いて、訳のわからないことを言っていた。

砂浜にグワリと足が沈む変な感じに慣れた頃、軀に刻まれていた鎖の重みは消えていた。

シロは思いのままに、島の海沿いを歩いた。高い口笛の音が聞こえたら、お決まりの岩場に行き、魚の入ったバケツを運んだ。

「その重さは、飯のあとのお前さんの腹の膨れ具合と一緒にだぜ」
源ジイは、よくそんな嘘をついた。バケツが軽ければ、その分、自分の食い扶持を減らし、シロの腹を膨らましてくれていたのだ。

海が静かに凧いでいる時には、釣り人が小屋を訪れた。

「一人きりの島ぐらし、寂しくないですか」

「人が恋しくなる時もあるでしょう」

ちよくちよく聞かれていたが、源ジイの答えはいつも同じだった。

「わしは一人じゃない」

ぶすりと言っては、シロの背に優しい手を伸ばしていた。
夕べだつてそうだった。

寝袋にもぐりこんだ源ジイは、隣に寝そべるシロにそつと手を伸ばし、毛並みにそつて撫でてくれていた。けれど、朝起きたら、その手は冷たくなっていた。朝の決まりごと、無線機からの呼びかけに

も起きなかった。

一緒に暮らし始めて三回目の初雪を見る前の晩に、源ジイの魂は別の世界に旅だったのだ。

本当の所、シロはあの細い体にずっと寄り添っていたかった。

けれど、源ジイが連れてきたのは、この島。だから、ここに残るところが、死の扉をくぐろうとしていた自分に声を掛けてくれた人への弔いのような気持ちがして、そちらを選んだのだ。

「あの人は死んでしまった。けど、匂いは思い出と一緒に残っている。仲間がいなくなるというのは、よくわからないことだ」

いつの間にか、窓を照らす灰色の明るみは、暗い滲みに変わっていた。夜の静けさに、低いつぶやきが溶け込んだ。

「食べた物が、お腹の中で消えてしまうのとは違うのさ」

「偉そうに」

ぼそりと言ったシロは、サラサラと降りしきる雪の音を聞きながら目をつぶった。

3、狩り

バサッ！

地に物を投げつけたような音に、シロはびくりと飛び起きた。

窓から光が斜めに射し込み、埃がチリチリと流れていた。

「屋根から雪が落ちたんだよ」

すぐ前で、チュウ公が袋から流れ出た米粒を噛んでいた。

「そんなの知つてら」

シロは後ろを向いて強がりと言った。これまでは、たとえ、地面を揺るがす雷が鳴ろうと、知らん顔をして寝ていた。いつの間にか、ひどく敏感になっていたようだ。

「さて、朝飯にするか」

一度起きてしまったら、もう目が冴えて眠れなかった。チュウ公の米粒をかじる音に誘われるように、腹がグウーと鳴っている。早速、箆笥の前のバケツに首を突っ込んだ。が、魚はいない。

そういえば、一昨日はバケツを運ばなかった。

『ああ、おいら、気づいてなかった。あの日、源ジイは昼間から、調子が悪かったんだ・・・』

「これ食べる？」

頂垂れたシロに気を遣って、チュウ公が米粒を差し出した。

「ありがとうよ。けどそのままじゃ、スカスカしてて口に合わねえ。おいらにや、おいらの食い物ってやつがあるんだ」

こそ泥鼠の可愛い頭をそつと撫でてから、昨日掘り込んだ穴に首を伸ばした。

「おい、じりゃ・・・」

小屋の外には、息を飲むような美しい景色が広がっていた。銀色に輝く山が、澄んだ空の下に気高く座っている。煌めく海と真っ白な海岸線がずーんと先まで伸びている。

まるで、まだ誰も訪れたことのない神聖な世界、新しい生活を始めるシロを迎えてくれているようだ。

「ようし、いくぞ！」

キラキラと突き刺す光に、目を細めながら走り出した。

今日からは、自分の足と牙をつかって、獲物をとらなければならぬ。幾ばくかの不安はあったが、吹き上げる煙のような白い息が、否が応にもやる気をそそった。

『さてこの辺りでと・・・』

荒い息遣いのまま首を回せば、そこは、いつも源ジイが釣りをしていた岩場だった。知らぬ間に、足はお決まりの道を辿っていた。

『すっかりせんと。おいらは、釣りなんかしねえ』

苦笑いしながら、そこにさよならをし、波の静かな入り江に向かった。

「おっ」

思わずにたついた。泡立ちながら雪を溶かす波の先に、チュウ公の倍ほどもある魚が打ち上げられていた。酸っぱいような匂いがしているが、腹に収まれば皆一緒だ。

ガブツ！

勢い込んで噛みついた。

途端に喉の奥が激しく拒否した。それはドロリと腐っていた。慌てて吐き出し、塩気混じりの雪で、シャリシャリと口の中を掃除した。それから、太陽が空の頂きに昇るまで海沿いを歩き続けた。

だが、めばしいものは何も見つけられなかった。ついぞの間までは、ぞりぞりと歩く蟹や、砂浜にニョキリと突き出す貝がいたというのに。

辺りは、氷の息のような風が吹きつけるばかりだった。

もはや季節は冬の真っ只中、風が緩くなるまでは食べ物は現れないのだ。

波の上には、黒っぽい鳥が呑気に揺れている。時折、ひっくり返っているところを見ると魚がいるのだ。目と鼻の先に獲物があるというのに、残念ながら、シロは魚獲りなどできない。

「そもそも、こんなところで、食べ物を探したのが間違いだった。そうさ、おいらは陸を走る動物なのだ」

頭を切り換えて、熊笹の生い茂る山に分け入った。

実の所、シロはこれまで山に入ったことがなかった。

源ジイは時折、山菜や木の実を採りに行っていたが、シロは専ら海辺をほつつき歩いていたので。

カサツ、カサカサツ

いく先々で茂みが揺れ、はらはらと雪が落ちた。嗅いだことのない動物たちの匂いが漂っている。シロの近づく気配を感じ、逃げだしているに違いない。あちらが上手なのか、その姿を見つけることはできなかった。

『まったく、おいらと面を合わせるような勇気のある奴はいなのか・
とと』

途中、開けた窪地に出た所で、足を突っ張った。

シロよりも二回りも大きな鹿が、雪に埋もれた草を食べていた。木の枝のような角の根元の尖った耳は、こちらを向いている。

鹿は、シロが間近にいることを知っているのに、逃げようとはしなかった。

正直、シロはびくついていたが、最初に出会った獲物。これを逃す手はなかった。

『さて、どこに噛みついてやるう。腹か、足か、それとも、あの肉付きのいい尻にか。よし、まずは首だ』

前足の上、筋の浮き出た首に狙いを定めた。

「止めておいたほうがいい」

唐突に鹿が話した。

シロは凍り付いたように固まってしまった。チュウ公は別として、島の動物が口をきくなんて思ってもいなかったのだ。

「おまえさんは、狩りというものを知らないらしい。無理に戦えば大怪我をする」

全く落ちついた物言いだった。ゆったりと顔を上げ、高い所から見下ろしている。

・草を食む牙のない動物に、そんなことを言われるなんて・

「くそう！」

悔しさが燃え立ち、シロはしゃにむに突進した。

パンツ

硬く高い音とともに、鹿はシロの頭上を超えて跳び、茂みの中に消えていった。

「・・・」

躯中の毛が逆立った。

目の前にあつた厚い平石が二つに蹴り割られていた。もし、あの逞しい後ろ足で蹴られていたら、背なり首なり、骨が粉碎されていたに違いない。

山には、今のシロには、歯が立たない動物がいるのだ。

『これから、おいらが相手にしていくのは、自分だけの力で生きている奴ら。野生の獣なのだ』

シロは気を引き締めて歩き始めた。

暫く行くと、茂みの外れの雪の上に、コロコロとした糞が落ちていた。ちつぽけな足跡も残っている。

更に進むと、あちこちに探し物でもするように跳ねる動物がいた。耳が長くて丸い姿。町でも見たことがある兎だ。これならいけそう
だ。

幸い、シロは風下にいた。ざわつく枯れ葉は、雪の下に凍っている。息をひそめ、そっと近付いた。頸を低く構え、後ろ足に力を溜め込んだ。

小さくて弱そうな動物を襲うなど、卑怯な気もしたが、生きるためである。自分を奮い立たせ、雪を蹴って突進した。

あつという間のこと、シロの牙は、柔らかい背中に噛み付いていた。「痛い！」

兎が叫んだ。

「ごめんよ。おいらの腹に入ってくれ」

「お願い、放して」

その声を無視して、もう一度、ザクリと噛みなおそうとした。だが何故か口は動かなかつた。

牙が緩んだちよつとした隙に、軀をくねらせた兎は地面に落ち、どこかに走っていった。

「一体、どうしちまつたんだ」

夕方近く、大部暗くなった小屋の中で、シロはぼやいた。

「兎だけじゃねえ。木の根っこには、チュウ公よりもっと小さい奴だつて眠っていた。けど口は、肝心な所で止まっちゃう」

「ははあ、それはヤマネだね。けどさ動物が話をするなんて当たり前だよ。ほら、僕だつてしゃべってるし。それにしても、狩りをしないなんて。君はまだ人間と暮らしているみたいだね」

米袋に軀を潜らせたまま、チュウ公が言った。

「源ジイはもういない。そんなことは分かっている。お前だつて、

おいらの腹に入っていないはずなんだ」

言ってはみたが、歯が浮いているようでしっくりこなかった。

「夜に出かけたらどうか。噛み付いた動物がしゃべっても、姿が見えなかったら、そのまま食べられるかもよ」

「なあるほど」

小さなおつむながら、チュウ公の言葉は的を射ているようだった。

シロは珍しく素直に頷いた。

とつぷりと日が暮れるのを待ってから外に出た。空には丸い月が顔を出し、辺りの景色を浮き上がらせていたが、山に一步踏み込めば、暗闇そのものだった。

シロは、木の枝に軀中を引っかかれながら、動物の匂いを追いかけた。けれど、やはり駄目だった。

毛皮に噛みつくまではできる。でも、それから先、牙を深く突き立てることはできなかったのだ。

「おいらは犬だ。腹が減れば、狩りもする！」

シロは山の端に突き出した大岩の上で叫んだ。

町にいる時も夜中に大声を出したことがある。あの時は起き出した人間に、うるさい！と怒鳴られたが、ここでは遠慮はいらない。

空っぽの胃袋がひっくり返るほどにさんざん叫んだ。

息を吐き過ぎて、頭がクラクラしてきた。しかし、苛立ちは鎮まることはなく、自分の不甲斐なさが蘇るばかりだ。

『もういい、また明日、出直した』

と、踵を返そうとしたシロの目に、おかしな光景が飛び込んできた。

「道？」

山裾に照らつく海が二つに割れていた。よく見れば、ずっと遠くまで、細い道が伸びている。先には黒い鳥影があるようだ。

・お前を待っている・

誰かが呼んでいるような気がした。

シロは転がるように山を駆け下りた。殆ど行ったことのない磯辺から、海を横切る道がはじまっていた。先ほどより幅を広げている。両脇には、飲み込む獲物を待っているように波がさざめいている。『いけるか』

不安が走ったが、胸の奥でちよろちよろと燃えだした熱いものが、それを打ち消した。

ザッザッ　　ザッザッ

シロは、水気たっぷりの荒砂に足を沈めながら走り始めた。

軀にまとわり付いていた何かが剥がれていくようだ。前に進むほどに、足は軽くなっていった。

4、向いづ島

行き着いた先には、岩だらけの黒い島があった。時折、寝ぼけたような鳥の鳴き声が聞こえてくる。

シロは険しい坂を跳ねとびながら登っていった。慣れない登りだったが、月が次に飛びつく岩の縁に光を伸ばしてくれていた。辿り着いたのは広い草原だった。

昼間の光に溶けたのか、雪は殆どなく、冷たい風がごろついた岩の上をそそと撫でていた。

「クワツ！だれだ」

歩き出そうとした所をいきなり襲われた。

肩に鋭い痛みが走った。翼を広げた大きな鳥が、鋭い嘴で突いてきたのだ。

「よそものだ」

「やつつける」

声に応じて鳥たちが集まってくる。たちまち周りを取り囲まれてしまった。

「ちよつと、待っておくれよ・・・」

シロは尻込みするばかりだったが、

グウ オオーオン！

突然、地面が震えるような吠え声が轟いた。

辺り一面、慌てふためく鳥たちの羽音と甲高い鳴き声に包まれた。逃げ惑うものが次々とぶつかってくる。

シロは前も後ろも上も下も、訳が分からなくなっていた。

ふと気がつくと、目の前に鳥が置かれていた。

・・・これはお前のだ・・・

耳元で懐かしいような低い声が聞こえた。

「えっ」

振り返ったが、姿は見えなかった。声の主は風下にいたのか匂いさえしなかった。

シロは差し出された獲物を、おそろおそろ嚙んでみた。

今回、食い込んだ牙が止まることはなかった。それにその美味いこと。魚ばかり飲み込んでいた喉が大きくうねった。

ウォーオン！

久しぶりに、腹の底から声が出た。

満腹になってほっと息をついた所で、足がガタガタと震えだした。

『さっきのは何者だったんだ。あの激しさと荒々しさ・・・』

元の島で鉢合わせした鹿と同じだ。生きていく力をそのまま軀に宿らせている野生の獣。

『それにあの腹に響く吠え声はどうだ。あいつは肉を引きちぎる鋭い牙を持っているに違いない。今も、どこかでこちらの様子を窺っている』

考えると、怖ろしくなってきた。

シロはへたりそうになる足に力を入れ、そそくさと坂を下り、海の間道の道に乗った。道は来た時よりも、大部細くなっている。

島に帰りつく前に波に覆われ、しまいに足も着かなくなってしまう。ガボガボと塩水を飲みながら、なんとか泳いで渡った。

「うわー、びしょ濡れ。それに海の匂いがする。魚でも獲っていたのかい」

小屋に戻ったシロにチュウ公が聞いた。

「そんなことするかい。それよりおいら、凄い奴と出会っちゃまった

んだ」

黙ってはおれなかった。向こうの島での出来事を話した。

「そんな獣が近くの島にいるなんて。こっちに渡ってきたら動物たちは皆やられてしまう」

小さな躯の鼓動が早まっていた。

シロだってそうだ。話したら楽になるだろうと思っていたが、とんでもない。先程のことが、まざまざと思い出され、よけいに胸が苦しくなってきた。

「でもさ・・獲物をくれたりして、その獣は、君を仲間だと思ってるみたいだね」

「仲間だって」

切り出されたチュウ公の言葉に、シロの頭の中の靄つきが拭われた。

『確かにそうだ。あの怖ろしげな低い声には、何処かで聞いたような懐かしさもあった』

「それって、一匹だけだったの？」

「ああ。はっきりとは分からないがな」

「じゃあ、寂しかったのかもしれないね」

「かもな」

適当に返事をした。

あの獣は確かに親切にしてくれた。でも、寂しがっていたとは思えない。まるで世界のあらゆる命を仲間に行っているように、力に溢れていたのだ。

『それにしても奴は何者なんだ。牙の生えた野生の獣。分かっているのは、ただそれだけ』

強く打ち続ける鼓動を聞きながら、シロは目をつぶった。

次の日から、シロは夜毎に向こうの島に渡るようになった。とはいっても、いつも腹が減っていたわけではない。

「怖くないの。僕だったら二度と行かないけど」

「そりゃ身震いするほどに怖いさ。けどな、あいつの息づかいを聞いていると、生きてる感じがするっていうか、たまらないんだ」
首を傾げるチュウ公に、シロは答えた。

初めて会った時もそうだったが、獣は決して姿を見せなかった。どうやっているのか匂いさえも消している。

ただ、命の塊のような激しい息遣いと、風のように走る足音が聞こえるだけ。そしてシロが本当に空腹の時だけ、獲物を捕まえてきてくれたのだ。

それから数回、どっさりと雪が降った後、ようやくぬくぬくとした風が吹きはじめた。山の木々には、花の蕾もちらほらと見られるようになった。

海辺には蟹や貝も姿を現し、手近な所で腹を一杯にできるようになった。それでもシロは島に渡り続けた。

海の道は日によって現れる時間が変わり、広い時も狭い時もあった。中ほどまで行った所で荒波に覆われ、溺れかけた時もあった。

しかし、幾度となく通う内に気付いた。波のざわめきが少しばかり遠ざかった時に、そろそろと小屋を出ていけば丁度よかったのだ。

むせるような草の香りが漂うようになったある晩のこと、島に渡ったシロの後足に、突然、ロープが絡みついた。

引きちぎろうと暴れていると、何処からかプスリと軽い音がして、腰にちくりと痛みを感じた。すぐにも軀が痺れてきて、立っていられなくなった。

シロはびっしりと貝がこびり付いた岩の上に倒れた。

風下の大岩の陰から人間がのそりと現れ、肩を押さえつけ、「静か

にしとりよ」と、重い首輪を付けた。

「助けてくれ！」

シロはか細い声で叫んだ。

獣が現れて人間を追い払ってくれることを願ったのだが、あの荒々しい息遣いを聞くことはなかった。

『ということは・・・』

シロの頭の中に、昔見た光景が蘇った。

冷たい部屋で暴れていた犬は針を打たれ、二度と戻らない部屋に送られていた。

『自分にもその時が来たのか』

けれど結果は違った。人間は意外にも優しくシロを抱き上げると、波飛沫の届かない岩の上に寝かせ、そのまま姿を消したのだ。幸い、鳥たちのさわぐ草原よりずっと下だったので、つつきまわされることはなかった。

朝がきて、やっと痺れが取れた。足に絡みついたロープは解かれている。重い首輪はそのままだったが、動くことに問題はなかった。

「なんだったんだよ」

腰に打たれたもののせいか、頭にもんやりと霞がかかったようだった。早く降りたかったが、海の道はとうに消えていた。シロは行く当てもなく急坂を登っていった。

「はあ、ここは」

シロは目を見張った。

始めて見る光に満ちた草原は、まさに鳥たちの楽園だった。

いつも見かけている黒っぽい鳥もいるが、向こうの崖側に下るほどに、大ぶりの白い羽根の鳥が増えている。

『最近、草原が混んできていたと思っていたら、こういうわけだったのか』

バサッ！

近くにいた黒い鳥が、警告するように翼を広げた。足下には草や枝が重なっている。卵を産む準備をしているようだ。

「別にあんさんの邪魔をしようとしてるわけじゃないさ」

鳥たちを怒らせないように、シロはそろそろと歩きはじめた。

たぶん、獣かシロがご馳走を食べた跡なのだろう。時折、汚れた羽根が散らかっている所があった。

「ありがとうよ」

その羽根の持ち主に言った。

これまで、食べたものに、礼など言ったことはなかったが、耳の奥にこびり付いている獣の息遣いが教えていた。

・腹に入ったものは、命を分け与えてくれている・・・

どこかすぐ近くから、獣に見られているような気がしてならなかった。

「わかつているさ。あんさんは、昼間ののんびりした世界には現れない。けど夕べは、どうして来てくれなかったんだい」

見えない聞き手にぶつくさとはやき、そうこうしているうちに、草原を一周してしまった。

下を見れば、島に帰る道が伸びている。道は、昼と夜の二回、できていたのだ。

シロは素晴らしい海の眺めを楽しみながら、ゆっくりと帰っていた。

小屋には、チュウ公の姿は見えなかった。太陽が高い所にある時は、物陰で眠っているのだ。

話し相手もおらず、疲れがどっと襲ってきた。一眠りするかと、いつもの寝袋の上に軀を伸ばした。と、耳がピクリと跳ねた。

蜂の羽音のようなブーンという音が聞こえたのだ。壁の隙間から入りこむ風が、用心しろと言っている。

『船だ。昨日の人間がやってきた』

匂いで分かった。砂浜に船を乗り上げ、小屋に近づいている。

妙な首輪を付け、シロを放っておいた人間・一体何の用があるというのだろうか。

短く息を吸ったシロは、軀を硬くして身構えた。

「おーい、君、そこにいるんだろ」

明るい声が外に聞こえた。

戸がぎしぎしと揺れている。バリバリと板を剥がす音とともに強い風が吹き込んできた。

「怖がらなくていいんだよ」

砂の段のできた戸口に立っていたのは、若い男だった。手に持っている機械をシロに向けると高い音が鳴った。

男がつけた首輪、それがシロの居場所を教えていたのだ。

「しかし、驚いたね。干潮時間になって浅瀬を渡って戻ってくるなんて」

言いながら男は、甘い香りのする黒い塊を差し出した。以前、人間の子どもから貰ったことがある。

『ああ・それは心をとるかすチョコレート。ずるいよ、そいつは反則だ』

剥き出していた牙の間から、ポタポタと涎が落ちた。

情けないことに、シロの目はチョコレートしか見えなくなった。それが、空中をふわふわと飛んできて、口の中に入った。

甘い塊が舌に絡みつきながら、ゆっくり溶けていく。頭の芯も一緒にとろけていく。

じっくりと味わい、ぺろぺろと口の周囲を嘗めている時にはたと気が付いた。

シロは、だらしなくごろついて、男に腹をさすってもらっていたのだ。重い首輪を外されて、何とも言えずつつとりした気分である。

『何の用でもいい。余計な心配など何処かにすっ飛んでいけ・・・』

5、獣の正体

その日から男は小屋に住むようになった。

男は源ジイのように釣りをすることはなく、時折島にくる大型の船から、食料やら機械やらを運び入れて生活していた。その中には、懐かしい歯応えのドックフードもあり、以前からシロが使っていた皿に入れてくれた。

「シロといると、すぐくほっとするよ」

皿に書かれていた文字から名前を知ったらしく、男はよくそんな風に声をかけてくれた。

男の仕事は、向こうの島の鳥たちを観察することだった。

昼間、カメラやビデオカメラを肩に掛けて小屋を出て、小型のボートで出かけていた。

夜には、持ち込んだコンピュータの画面に鳥たちの姿を映し出し、それを睨み付けながら、しきりに何かを書いていた。

どうやら鳥たちが溢れる向こうの島は、特別な場所だったようだ。

一度、耳が折れ曲がるような風を巻き上げ、ヘリコプターが空から降りてきた。

男は、ネクタイを締めた人間たちを小屋に招き、鳥たちの数や生活ぶりについて熱心に説明していた。

シロは耳を澄まして聞いていたが、気になる獣のことについては、一言も語られなかった。

どうやら獣は、男の仕事を邪魔することなく、うまく鳥たちを口にしているようだった。

「しかし、一人暮らしは大変だろう？」

立ち去る前に、来客が尋ねた。

「いいえ、素敵な相棒がおりますから」

どこかで聞いたような質問と答えだった。

男がゆったりと背中を撫でてくれる一方、シロは鼻の先が熱くなり、続けざまに三度もくしゃみをした。

そうして、日は流れていった。

いつの間にか、シロの生活は居心地よく戻っていた。腹が減ることはなく、人間の温もりに触れながら眠ることができたのだ。

それでも、どうしても獣に会いたくなり、五日とあけず小屋をこっそりと抜けだした。

近頃は卵を産み、ひどく攻撃的になっている鳥で溢れているせいか、獣はしゃにむに走ったりはしなかった。けれどその息をひそめた足取りに、反って張り裂けんばかりの生命力を感じた。

「シロにとって、あちらの島は何なんだい」

ある日の明け方、大雨にずぶ濡れになって帰ってきた時、不意に問いかけられた。

シロは慌てた。

無論、男と出会ったのは向こうの島であつたし、シロが通っていることを知っていても不思議はなかった。

しかし、隠していた物を目の前に引き出されたようで、ひどく体裁が悪く感じた。悪いことをしているわけではないのだが、鳥を口にする獣に会いに行くことは、男を裏切っているように思えたのだ。

「たぶん君も、僕と同じように、あの島から生き甲斐を貰っているんだね」

男は一人頷きながら、尻尾を垂らしたシロをタオルで拭いてくれた。

「あんさんの言う通りさ」

シロはそっと呟いた。

島通いはばれていたが、今さら大っぴらに行くのもおかしいので、その後もこそこそと小屋を出た。

こそ泥の友人、チュウ公だが、男が小屋にやってきてから、めつきり姿を見せなくなった。男の食料をカリカリやっている所を叩かれて懲りたのだろう。それでも元気にやっているらしく、軽い足音が、床下や壁の隅に聞こえた。

夏にさしかかったある日の朝、無線機に耳を傾けていた男の顔が、急に険しくなった。仕事仲間から、よからぬことを聞いたようだ。「鳥たちが危ない。行ってくる」

いつも携行しているカメラも持たずに小屋を出て、ボートに乗り込んだ。走り去った先は、向こうの島だ。

・おまえもいくんだ・

胸の奥で、誰かが唸った。それは、一度聞いた獣の声に似ていた。潮はまだ引き始めていなかったが、シロは突っ走った。磯辺から荒海に飛び込み、必死に泳いだ。やがて道が現れ、荒砂を蹴り立てて進んだ。

向こう島の磯辺には、三艘のボートが揺れていた。小さいのは男のものだ。もう二艘は屋根付きでかなり大きく、いくつもの鳥籠が積みまれている。

男が小屋を飛び出していった理由が分かった。誰かがこの島の鳥を盗みにきていて、男は、それを阻止しに来たのだ。

草原まで登った時、目に飛び込んできたのは、倒れている男の姿だった。殴られたのか、腹を押さえて苦しそうに呻いている。その向

こうで、籠を抱えた五人の人間が、雛たちを捕まえていた。

ズダーン！

突然、雷のような轟きが耳を打った。

雛を守るうと襲いかかる親鳥に、一人が猟銃を向けていた。

激しい音は続き、その度に羽根が飛び散り、鳥たちは見えない力に弾かれたように地面に落ちていった。

・・・命の鎖を守れ！・・・

間近で誰かが叫んだ。

獣だ。獣がとうとう姿を現した。シロと同じような外見をしていて、目の前で陽炎のように揺らめいている。それは、そのまま滑るように流れ、シロの軀と重なった。

ウーオオーン

猛々しい吠え声が、喉の奥から迸り出た。

風を切って走りだしながら、シロはやつと気が付いた。

『この激しい息遣いと突っ走る足音。それを持っているのはおいら。獣はおいら自身だったのだ！』

そのまま、腹の底から沸き出てくる力に、軀を任せた。それは人間との生活で無理に押さえることを学んでしまった力だった。

シロはずつと不安だったのだ。荒々しい獣の顔を見せたら、また捨てられるのではないかと。だから、源ジイとの思い出が残っているあちらの島では、狩りができなかったのだ。

一方、こちらの島には、思い出なんてものはない。それで、自分の内に押さえていた獣を解放することができたのだ。

近くにいるようでも、姿は見えず、臭いさえもしなかったのは、シロ自身だったからだ。

『命の鎖・・・この島の鳥達は、厳しい季節においらの命を支えてく

れた。今だつて、人間とのあいだを取り持つてくれている。源ジイ、おいら、あんさんがいつていた鎖を見つけたぜ！」

「あいつ、犬を連れていたのか」

見知らぬ人間たちは、突然現れたシロに慌てていた。抱えていた籠を落とし、顔を引きつらせている。

『こいつらには、生半可な脅しじゃ駄目だ。なにせ同じ人間を傷つけ、雛を獲るためには、平気で親鳥の命を奪う連中なのだ』

シロは許さなかった。口が裂けるかとはかり牙を剥き出し、飛び掛かって言った。

「シロ、気をつける！」

後ろから叫び声が聞こえた。ふらりと立ち上がった男が指したほうを見れば、銃口を向けた人間の姿があった。

ズダーン！

筒の先から炎が飛び、わき腹に、炭火に触れたような激しい痛みが走った。でも、シロは怯まなかった。地を蹴って高く跳ぶと、猟銃を持った人間の腕に、牙を突き立てたのだ。

「た、退散だ」

掠れた悲鳴をあげ、その人間は、半ばぶら下がったシロを振り落とした。

男達は、大きな石を握りながら後ずさりし、草原から姿を消していた。

「まだ懲りないのか！」

シロは後ろから近づいた人間に飛び掛かった。

「こらこら、僕だよ」

聞き慣れた声でしたが、燃えあがった獣の息遣いは収まらなかった。噛みついた腕から、血が滴りだした時に、ようやく元のシロに戻った。

「ありがとう、君のおかげだ」

男が言った。それは、ずっと前にも聞いた言葉。ほろ苦い感謝の言葉だった。

結局、シロはまた人間に噛みついてしまったのだ。事もあるうちに一緒に暮らしている人にも。

『今度は、一足飛びにあの世行きだ』

自分の腹からドクドクと流れ出る血を見つめながら観念した。

『けど・・・』

シロは満足だった。

命を支える大切なもののために、精一杯のことをしたのだ。

優しく抱いてくれていた男の顔がかすみ始めた。眩しい空が、暗く狭くなっていく。

6、仲間への挨拶

カリカリ カリカリ・・・
聞き慣れた物音がしている。

目を開ければ、暗がりの中、天井から下がった電灯が揺れていた。

「これは、あの世で見る夢か」

そう呟いたシロは目をしばたいた。

鼻先の皿に盛られたドッグフードを囓るチュウ公が、一、二、三と数えて六匹もいたのだ。

「ねえ、こつちを見ているよ」

一匹が睨みつけるシロに気が付いた。

「跳びかかってこないかな」

「安心おし。軀は大きいけれど優しいんだ。ねえ、シロくん」

呼びかけられたが、頭は混乱したままだった。

「おまえら なんなんだ」

シロは一番近くにいた鼠を小突こうと手を伸ばした。途端、ずきりと横腹が痛んだ。首を曲げれば、白い布がぐるぐる巻いてある。

「無理しちゃ、だめだよ」

五匹が退く一方、一匹が進み出た。

「僕の嫁さんと、子供たちなんだ」

なんてこと。随分見かけないと思っていたら、チュウ公は結婚して子供まで作っていたのだ。

「そんなこと言われたって、皆、チュウ公に見えらあ」

六匹を一纏めにしてゴロゴロと転がしてやった。

「けどおいら、どうなったんだい。一緒に暮らしていた人は？」
小屋には見知らぬ人間の臭いが漂っていた。

「あの人は、ぐったりした君を担いで来たんだよ。それで話をする箱に助けを呼んだんだ。それから・・・」
話が途切れた。

小屋の外に人間の足音が聞こえたのだ。そのままチユウ公の家族は、
箆笥の後ろにもぐり込んだ。

「やあ、目が覚めたんだね」
嬉しそうに笑いながら男が入ってきた。シロが噛みついた片腕は、
痛々しく布で吊ってある。

「今、獣医さんを船まで送ってきたんだ。目が覚めるようなら大丈夫だと言っていたけど、どうだい？」

・・・仲間が心配してくれている。きちんと答えてやらんと・・・
胸の奥から獣の声が聞こえた。

「仲間。そう、この人とは温かさを分かち合える。多分これから先もずっと」

すつくと起き上がったシロは喉を開け広げ、腹の底から声を突き出した。

ウォーン オオウーン！

いきなりすることに、男は驚いたように身を引いたが、すぐに顔をくしゃくしゃにして駆け寄り、力強く抱きしめてくれた。

傷の痛みが腹全体に響いたが、それは美味しいものをたらふく食べた時のように、満足感のある痛みだった。

・・・また会おう、向こうの島で・・・

低い声とともに軀から力が抜けた。胸の奥の獣は、眠ってしまったようだ。

『それでいい。必要があれば、獣は目を覚ましてくれる』

「あんな、兄さん」

伝わらないことは分かっていたが、シロはニタつきながら男に言った。

「ドッグフードも獣医さんもいい。けど、今度は、おいらの嫁さんを連れてきておくれ」

どこか片隅から、クスクスと笑い声が漏れた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6662f/>

走れシロ！海の道を < 孤島にただ一匹残された犬の物語 >

2010年12月31日08時30分発行